

『ふゆみずたんぼ』の10年総括評価と次の10年に向けての継続基盤の形成

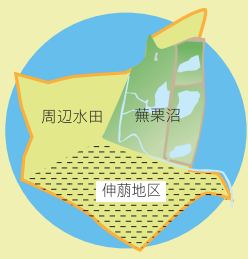
申請者 東北大学大学院農学研究科附属複合生態フィールド教育研究センター 伊藤研究室
NPO法人たんぼ



目的・背景

宮城県大崎市田尻地域で2003年より取り組まれてきた「ふゆみずたんぼ」は、2005年の「蕪栗沼・周辺水田」のラムサール条約湿地登録を受けて、環境面での水田の重要性を世界に大きく浸透させ、2008年には、ラムサール条約第10回締約国会議で決議された「水田決議(湿地システムとしての水田に於ける生物多様性の向上)」の採択に大きく貢献しました。

本活動では、この取り組みが10年経過することを機に、農法、生きものなど生物多様性、多様な主体の連携による地域づくりなど、10年間の成果、課題、展望をまとめ、知識と経験を後世に継承する記録書を制作し、活用します。また、その政策に際し、農法としての「ふゆみずたんぼ」や、大崎市発祥の品種であるササニシキの特性を改めて認識し、地域固有の価値を高めることを目的とします。



『ふゆみずたんぼ』とは？

冬にたんぼに水をはる農法です。春まで水をためておくことで、稲の切り株やワラなどの有機物が水中で分解され、微生物や藻が発生します。それらを食べるために、昆虫や渡り鳥など多様な生き物が生息することができ、豊かな水田へと生まれ変わります。

宮城県大崎市田尻の伸萌地区では、10年以上にわたって実践し続けてきました。また、津波被災地のたんぼでも、同様にこの方法によって、復興が試みられ、成果をあげています。



活動の内容

ふゆみずたんぼの10年と今後の展望作成

- ・編集委員会
- ・インタビュー
- ・原稿作成
- ・原稿集約・編集
- ・印刷製本

ふゆみずたんぼ農法研究

- ・水温、地温の調査
- ・水管理、雑草管理技術
- ・ササニシキの有用性
- ・成分分析
- ・食味官能試験

主要団体の組織化、基盤整備

- ・関係者による会議の開催
- ・組織化を検討
- ・組織化をめざす

●『ふゆみずたんぼ』の十年総括評価と次の十年に向けての継続基盤の形成

●他地域への普及、技術の提供



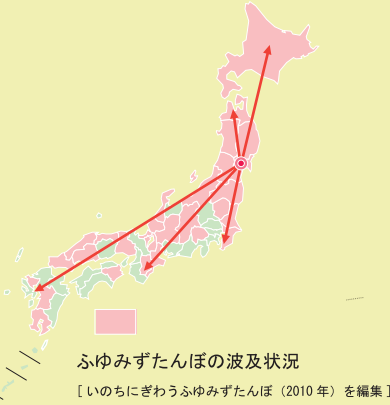
ふゆみずたんぼの10年と今後の展望



参考文献調査 『会津農書』貞享元年(1684年)



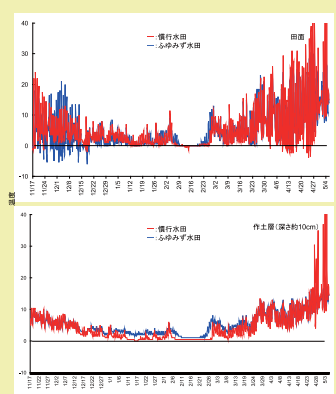
ふゆみずたんぼの生きもの調査



ふゆみずたんぼの波及状況 [いのちにぎわうふゆみずたんぼ(2010年)を編集]

成果・展望

- ふゆみずたんぼ農法の手法や、10年間で得られた技術的課題とその解決策の明確化
- 他の地域への普及を見据えた基礎資料の作成
- ふゆみずたんぼ農法の特徴と生物多様性の優位性に係る基礎データの収集
- 10年間の評価作業過程で、中核生産者団体の成果と今後の展望について、農業者及び支援組織等の関係者間で意見交換し、法人化することが合意された
- 中核生産者団体の法人化により、組織としての基盤が強化され、担い手不足や低コスト化への対策が期待できる
- 田面及び作土層の温度変化調査より、地域・湛水深度により差はあるものの、温度変化が少なくなり、ふゆみずたんぼが冬期の水田における水生動物の生息の重要な越冬条件の一つ、温度条件を緩和することが分かった
- 他方、湛水により、その他の陸上生物への負の影響調査を含め、地域の生物相を把握、対象区との比較をすることが、ふゆみずたんぼの生物多様性に係る優位性がはかる上で必要である
- 県営ほ場整備において「ふゆみずたんぼ専用エリア」を設けることになり、今回、研究で得られた成果をもとに抑草の技術的対応が期待される



ふゆみずたんぼの田面と作土層の温度変化